

# 新海大介先生の「教え教えられる中で数学的な力を高め合う「みんなで学ぶ」場の設定」について

愛知教育大学 青山和裕

新海先生の実践は、学級全体で学び合う雰囲気をいかに作り上げていくかという課題に取り組んだものである。学校での学びというものは、生徒が個別に学習を深めていくのではなく、生徒どうしが関わり合い、高め合いながら学習していくことが望まれる。多くの実践研究でも目標として掲げられているが、実現することはそれほど容易ではない。

さて、新海先生の実践では、問題が早く解けた生徒を「丸つけ部隊」として編成し、まだ解けていない、もしくは解けずに困っている学友にアドバイスする環境を設定している。問題を解いて正解かどうか確認したらそれで終わりではなく、周りの学友に目を向け、生徒どうしが支援し合いながら学習を進めていっている。丸つけ部隊になった生徒は、学友に教える中で、別の視点から学習内容を振り返ることとなり、教える中で自らも学ぶということができていた。

この実践について、次の3点のことを述べさせていただきたい。

- ・他者に対して説明するという行為を通じて学習内容が深まる

問題に正答することができるということは、その内容を本質的に理解しているということと同じではない。単に形式的に、あるいは手法として理解している場合には、計算して正答を導くことはできても、「なぜ」そのような計算をするのか、仕組みはどうなっているのかということについて説明することはできない。他者に説明するという状況に直面することで、学習内容を頭の中で構造化し、他者が理解できるようにかみくだいて言語化する必要に迫られる。これにより、教えられる生徒と教えている生徒双方の学習が深められることになる。

- ・授業への参加様式が変わる

「丸つけ部隊」では、学友の誤りの原因を見抜いたり、どこがわからずに困っているのか、どう説明したらわかってくれるかといった普段の授業では目を向けられない側面について考える必要に迫られる。また、学友に対して評価するということも含めて、教師に近い視線や役割で授業に参加することになる。通常とは異なる参加様式で授業に臨めることは生徒にとって刺激的であり、意欲向上や学習の深まりと結び付いているという側面もあるだろう。

- ・自己評価をいかに取り入れていくか

課題としては、自己評価をいかに取り入れるかということが挙げられる。自分の解答が合っているかどうかを教師や学友に判定してもらうのではなく、解答に至った道筋や根拠を振り返ることで、自分自身で正しいかどうかを判断できる。そういった姿勢を身につけさせていくことにも、今後は是非取り組んでもらいたい。